

まぜこぜプロジェクト X

濁点がとれて奇術師に！

私は今年、古希を迎えた。その肝試しとして札幌市役所に 500 万円の個人寄付を行った。なかなか痩せ我慢、痩せ我慢のいる肝試しであった。30 年前の 40 歳のときに技術試験に合格した。一応は技術者になれたというような気分がしばらくあったが、地域のボランティア活動に脚が向くようになり、技術士の当北海道本部(旧支部)の役員を退くころには社会的な身のこなしが洗練？されてきたのか‘ぎじゅつし’の「ぎ」の濁点をとれて‘きじゅつし’に変身していった。



前列右から白石区長、筆者、市民部長

何か特段の意図が作用したわけではなく、加齢とともに自然とそうようになっていた。奇術にはトリックがあり、その仕掛けをタネといい、トリックの仕組みを見せることをタネ明しという。ありていには言えば全てに裏があるという類のジャンルであり、格好良く言えば見えないところに真実があるというものである。タネの話を書いてはいるが、私個人にはタネがなく、子がおらず、従って孫もなく、加えて家内の数も僅か一人にすぎない。つまり、二人きりの生活なので、年長の私が長生きをしなければと心掛けている。そこで、暇を見つけ息を止めて、

時の流れを止める奇術を行っている。息を止めた後は、調整のために長息をつく、長生きというよりは単なる長息なのかもしれない。

1. 白石区災害防止協力会

最初のボランティアは、全 10 区毎にある「区災害防止協力会」に会員加入したことにより始まった。暴風雨雪や地震発災に市や区役所の要請により無償にて活動することを公に契約して防災出動に向かうための会である。そして何時とはなしに白石区の会長に就任し 1997 から 2009 年までの 12 年間責任者を務めた。

1996 年秋に北海道技術士会設立 30 周年記念行事として、大島紀房技術士が団長となり 1994 年 1 月 17 日に起きた米ノースリッジ大震災復興を見学するためにカリフォルニアへと向かった。その丁度 1 年後の 1 月 17 日に阪神淡路大震災が発生し、一人で 4 回見聞に赴いた。それらから得られた感慨を記したものが、北海道道路管理技術センターの「北の交差点」という会報に載せていただいた。

その一部が次頁の文面である。16 年も前のものであるが、2011 年の東日本大震災での感慨と大半が重なっている。残念である。とりわけ、原発事故は「想定外」では片付けられない人災そのものであった。これらを末尾に述べたい。



災害出動前の挨拶をする筆者



防災の心構えを話す(H14)

『天災は強大で防御のしようもない膨大な自然エネルギーの裏付けを持って人間社会に襲い掛かってくる。従って自然災害は人力や我々の一寸した知恵では止めようもない訳であるが、人災ならば人間そのもののことであるから、防御のしようがあると誰もが信じていたが、そうはならなかった。当時のマスコミは、阪神大震災を「天災+人災」の都市災害であったとした上で、その中でも特に人災部分の大きかったことを声高に飽くことなく繰り返していた。

自然災害の発生、つまり発災のあることを期待している者は皆無に近い。ではあるが、時々自然災害はやって来る、しかも大概のところ「忘れた頃にやっ

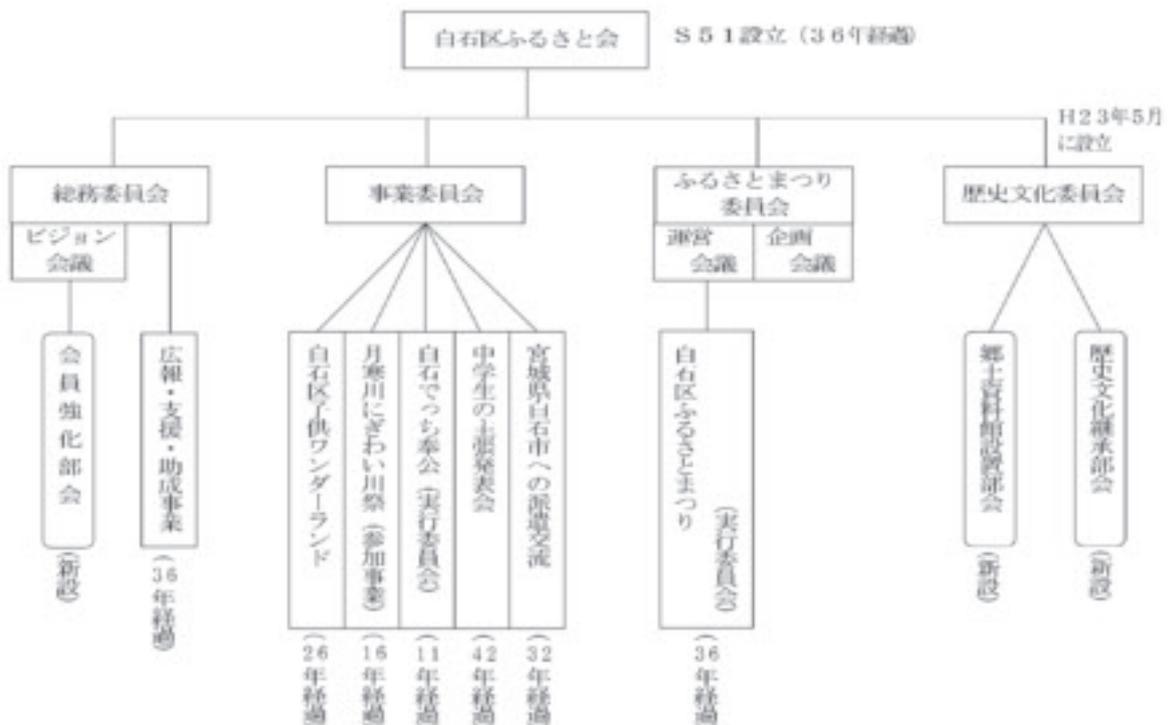
てくる』という始末に悪い厄介者である。発災は地球が天空の一角に浮いて太陽からの熱的、光的或いは熱波的、光波的影響を強く受けて励起される気象的変動と地球内部の地殻活動に起因する地球表層の物理的変動、或いはそれら両者の合力的作用によって生じるものであろう。

私共の命を生き育んだ地球は、矢張りそれ自身が生命体であるはずで、そうでなければ地球上の生きとして生ける者の命を創造できるはずもない。地球が生理をもつ生命体と考えるなら、その誕生があつていいし、死があつてもいい。

そして生命活動を続ける限りは咳やくしゃみがあつていいし、放尿脱糞、発汗、ヨダレがあつても致し方ないし、ニキビ腫れ物、擦り傷、骨折などもあつてよいし、時には出血なども生理上健康な著しと見るべきであらう。

そういった宇宙上の地球丸という生命体の表皮に寝起きする私共は、生理の消えた火星や水星上に住するのとは違う覚悟を持ってこの巨大な生命の呼吸と脈拍と鼓動、時にはその気分さえも窺わねばならぬことに遅まきながら気付くべきである。』

下表は、今私が会長を務める団体である。



2. 「白石区ふるさと会」街づくり委員に就任

1995年と記憶するが、白石区ふるさと会の街づくり委員に白石区長推薦で任命された。この会の名誉会長は区長で、役員会は18名ほどで構成されているが、その半数近い8名が連合町内会長、残り10名が各種団体の長が座る指定席(充て職)である。オール白石の会であり、当時は6委員会から構成されていた。現状は前図のように4委員会制となっている。



川祭りの仮設築堤と水車

高宮則夫技術士の発案で1996年夏に「月寒川にぎわい川まつり」が始まり、声をかけていただいております。第2回目の川祭りも同様な形式で実施され、お手伝いをしました。3回目は、故あって中断となったが、1999年春、街づくり委員長となった私は、この年、川祭りを区役所との共催事業として復活させることに成功した。川祭りは、小学生の皆さまに月寒川に入ってもらう、筏やカヌーに乗ってもらう、ゴムタイヤで川下りしてもらう、魚を釣ってもらう、水中生物を網ですくってもらう、木をこすって火をおこしてもらうなどの環境体験である。

川祭りは昨年16回目を終えた。8年前からか技術士会も川祭り実行委員会の一員に加わってもらえた。川の流れて私の造った水車を回し、鳥谷部晃綱技術士などのアイデアで、これから電気を起こす仕掛けづくりや、自転車のペダルをお子さんに踏んでもらい、その発電量を数値で知らせてあげる工夫をして参加者の人気を呼んでいる。奇術ではなく正に技術である。



川の環境体験



鳥谷部技術士とペダル回転発電



川の環境観察



露店とスイカ割り風景

3. 白石でっち奉公

1999年5月に街づくり委員長に就き、充て職で、ふるさと会役員に就任した。翌年、街づくり委員会の企画として、小中学生の社会体験事業のために一般の職場での1日職場体験をしてもらうことを実施した。好評であった。翌2002年には、これも区役所との共催事業となり、2002年春に初当選した上田市長の目にとまり、市内全中学に普及する事に力を注いでいただいた。昨年には、市内の全99の中学校で「社会体験としてのキャリア教育」の一環に取り入れられたと聞いている。中学校は全市で受け入れられたが小学校は、未だ白石区内のみの事業となっている。2009年4月、子供の権利条例が市議会を通過するや、上田市長の胆いりで市子供みらい局の「輝く子供の未来」という催しでの分科会のパネラーに任命され「白石でっち奉公」を広く語りかける機会を得た。そうそう、正しく奇術の極みであった。



ガソリンスタンド体験中の中学生

4. もっとも古い事業「中学生の主張発表会」

ふるさと会設立は、組織表に示したように本市の区政施行1972年の4年後、1976年である。中学生の主張発表会は、区政施行2年前の1970年に始まっている。昨年42回目を終えた。白石区内全中学の2、3年生が自らの主張を発表し、優秀者2名を宮城県白石市に派遣する事業も併せて行ってきた。



熱弁をふるう中学生



表彰状を渡す筆者



コンビニエンスストアでの中学生



区長を中心にして記念撮影



前列の2人は白石区の中学生代表者
後列3人は白石区からの随行者
(後方は宮城県白石城)



代表中学生の白石市内傑山寺参拝
(明治4年の移住と開村を導いた22歳の家老、佐藤孝郷の墓前に)

宮城県白石市と白石区は「友好都市」の契りを結んでいる。白石市近隣はかつて伊達家一家片倉氏の領地で1万8千石、白石城を有していた。此処のみが例外中の例外で何故か一国二城が許されていた。この白石城が奥羽越列藩同盟の最前線基地となったため戊辰戦争の敗戦処理で、この一帯は明治政府から厳しい処断を受けた。お城、武家屋敷、田畑など全て没収の憂き目にあつた。お殿様は隠居となり白石に残つたが、世子(世継ぎ)と3人の家老以下の主要層は明治3年夏と4年春に分かれ現在の登別市へ移住し、明治4年9月には若き家老のもと6百20人余の武士・家族団が現在の白石区に向かった。

この移住航海のときに大事故に見舞われた。2船に分かれ、4百余名を載せた先発の「咸臨丸」は松島湾を発し函館へ、そして小樽に向かう出港直後に木古内沖で座礁、浸水、そして沈没してしまう。木古

内漁民の懸命な救助活動で一人の死亡にとどまった。1団は函館に歩いて戻り後続の甲午丸に合流し小樽へ、徒歩で石狩の漁師宿へ、そして徒歩で未開の望月寒(白石中央)への道順をたどった。この年の暮、開拓使岩村判官より「白石村」の地名をいただいた。



開拓者の小屋掛け作業(‘白石の語り部たち’より転載)



晩年の佐藤孝郷(‘白石歴しるべ’より転載)

22歳で白石入りした佐藤孝郷は優秀な故に明治9年には開拓使役人に雇われ、最終的には大蔵省主税局判任官まで昇りつめた。

6百20人余の武士・家族団は、明治5年2月に二手に分かれ、本隊は白石に104戸380名、もう一隊は三木勉を頭に54戸241名が発寒(上手稲)にと住まいを定めた。そして、その明治5年のうちに子弟の教育のために白石には「善俗堂」、発寒には「時習館」が設けられたことには驚かすにはられない。

明治4年9月20日、咸臨丸破船という厳しすぎる船航海があった直後の白石村誕生であったから白石区役所発行の広報本は次の様な表紙となっている、右手中央に小さく「それは咸臨丸の船出に始まった」と題している。



破船後140年の昨年9月、木古内での「咸臨丸終焉140年サミット」に招かれ復元船の前で献花し、その後の全体会議のパネラーとなった。会議前に白石区の係長がこの刷紙を会場の皆様に配布したため、「だからここに白石区が出てくるのか」と愕きと納得がいただけた。



復元「咸臨丸」前での献花に向かう筆者
(三色旗はオランダ国旗)



パネラーとなり、白石区の歴史を語る

立場とは言え、赤平生まれの私が物知り顔で昔を語るのは厚顔であり奇術師以外の何者でもない。今年は4月末の横須賀市の「咸臨丸祭り」にも招待状が届いたので参加する予定である。

その後に送られてきた式次第は下記のように重々しいものである。私ども庶民が、ノコノコ顔を出しても受付ではじかれるような気がしてならない。ここでは「オランダ」がよく出てくるが、咸臨丸を建造した国であったことによる。

式 次 第 Order of Ceremony	
・開 式 Opening	
・ 國・米・日国歌演奏 National Anthems Kingdom of the Netherlands United States of America Japan	
・花輪供呈 (オランダ大使・アメリカ大使・横須賀市長) Presentation of Floral Tributes by Ambassador of the Kingdom of the Netherlands Ambassador of the United States of America Mayor of Yokosuka	
・式 辞 Address	横須賀市長 Mayor of Yokosuka
・祝 辞 Greetings	オランダ大使 Ambassador of the Kingdom of the Netherlands アメリカ大使 Ambassador of the United States of America 外務大臣 Minister for Foreign Affairs
・閉 式 Closing	

5. 白石区ふるさと祭り

この祭りは、いわゆる区民祭りである。区民祭りはかつて各区で盛んであったが、真の意味での区民祭りを保持しているのは、厚別区と白石区ぐらいである。昨年第36回目を終えた。今年も予算規模1,000万円、2日間の参加者3万人を予定している。開式の挨拶の口切は私で、次に宮城県白石市長、次に登別市長、最後が札幌市長(あるいは副市長)と定番化されている。



会場風景(H21)



左より白石市市長、筆者、札幌市副市長(H23)



婦人部が白石音頭を踊る(H21)
(テープではあるが声の主は都はるみ)



遠来の奥州片倉鉄砲隊(H23)



小学生の演奏(H21)



会場風景(H22)



若者の太鼓(H21)

第6回祭り(1981年)に白石市の甲冑武者隊に参加いただいたが、昨年は初めて、白石市の片倉鉄砲隊に参加いただいた。会場にいた老若男女から‘祭りに似合う’とのアンケート結果を頂き、今年7月も同鉄砲隊に演武いただくこととなった。

また、当地にも片倉鉄砲隊の分隊を設置しようとの機運が生まれ、昨年末にNHKの取材を受け、1月中旬に放映となっており見た方も居られよう。慣れない素人衆の録画取材には時間がかかるもので朝の9時から始まって、あちこち撮影場所を巡って歩き回り私が解放されたのは17時であった。鉄砲隊設置には教育委員会→文化庁と警察署→警察庁の認可が必要でなかなかハードルが高く、片倉本体は12年の歳月を要してようやく5年前に認可された。

認可の絶対条件は、江戸時代以前に本当に当該地に鉄砲隊や鉄砲鍛冶技術があったかということである。片倉鉄砲隊は伊達陣の先鋒として1615年5月5日、6日の大坂夏の陣の戦いで大坂方の真田幸村隊と鉄砲合戦となって勝利しており歴史的存在を示す証左となっている。私もこの3月、その合戦の跡地、「道明寺の戦い」周辺地を散策してきた。



白石城と片倉鉄砲隊の発砲

6. 地域づくり、街づくりへの心構え

今年の正月明け、白石区役所から委託を受けた出版社からの取材があった。地域づくり、街づくりに対する心構えや思惑や信念を聞きだされ、数十回のシャッターが切られる中で問いかけとメモと録音が続き90分ほどで解放された。14頁だての区役所広報誌のうち10頁ほどに「ふるさと会」の活動紹介をいただいた。

その中で、私の話した部分を広報した文面を区の下解を得て以下に掲載させていただく。

〈豊かな人情とゆるぎない風格のまちへ〉

『白石区ふるさと会』とは？発足に至った経緯とは？

1972年、40年前に札幌市は区制となりました。その頃はまさに経済の高度成長期の真っただ中で、地下鉄の開通など、街に力があふれていました。でも、経済的な余裕が生まれた一方で、住民の連帯感 は薄れていきました。そんな中、「この白石を若い人がふるさとだと思ってくれるようなまちにしたい」「郷土意識、連帯感を深めるような活動をしよう、白石を単なる都市ではなく人情味あふれる豊かなまちにしよう」。そんな気運が高まっていったのです。そうして1976(昭和51)年3月、白石区内の企業や地域のさまざまな団体が手を取りあって、この『白石区ふるさと会』ができたのです。

『ふるさと会』の魅力は？

白石区内の全ての連合町内会にまたがる「オール白石」、つまり特定の地域に偏らない活動体であるということが魅力のひとつです。毎年、三万人近い来場者を迎える「白石区ふるさとまつり」も、この長所を最大限に生かしたものと考えています。また、白石区ふるさと会は、開拓のルーツの一つであり、地名の由来でもある宮城県白石市と交流を続けており、昨年の東日本大震災の際には、短期間で白石市へ義援金の416万円を贈ることができました。このように素早くフレキシブルな対応ができるのも会の魅力だと感じています。

『ふるさと会』が伝えたい思いとは？

ふるさと会の行事は、小中学生を対象にしたものが多いのですが、これは子どもたちに白石をふるさととして大切に感じてほしいという気持ちからです。しかし、20年以上会の活動を行ってきましたが、目には見えない「人情」を主張するだけでは、ふるさと意識に目覚めてもらうことは難しいと感じるようになりました。若い世代には、目に見える形での取り組みも必要であると考え、昨年のふるさとまつりでは、宮城県白石市から「片倉鉄砲隊」をお招きするとともに、パネル展などで白石区の歴史やまちの魅力を紹介しました。こうした歴史的背景をふまえた事業を通じて、まちの風格を私たちがわかりやすく描き、若い人たちに「豊かな人情」と「ゆるぎない風格」を伝えていければ幸いです。

今後の私の目標、ライフワーク

昨年5月の総会では、「歴史文化委員会」の新設が承認された。その中に郷土資料館部会と歴史文化継承部会が置かれている。この3月の私共の市役所陳情で郷土資料館のスペースは平成28年に完成する新白石区役所の中に設けることがほぼ約束された。また、昨年8月11日には区長と一緒に青葉神社(仙台市)宮司で片倉家第16当主「片倉重信」様を訪ね「片倉鉄砲隊札幌白石分隊」の設立を認めてもらえた。後期高齢者入りする直前にこれら二つを成し遂げたいと念ずる者である。

7. 原子力発電について

2011年3月11日の東日本大震災により、福島第1原子力発電所(通称1F)は、制御破綻をおこして大量の放射能を大気中、地上、海中に放散してしまった。当事者、関係者の第1声は等しく「想定外」の力が作用して思わぬことが起きてしまったというものであった。

写真は、2008年3月に私が訪ねた際にカメラに収められたものである。1号機は、GEが設計し、日立製作所がその図面に従って機器を製作し、私のいた日立プラントテクノロジーが搬入、据え付け、組立そして昨年の震災当日まで維持補修を請け負っ

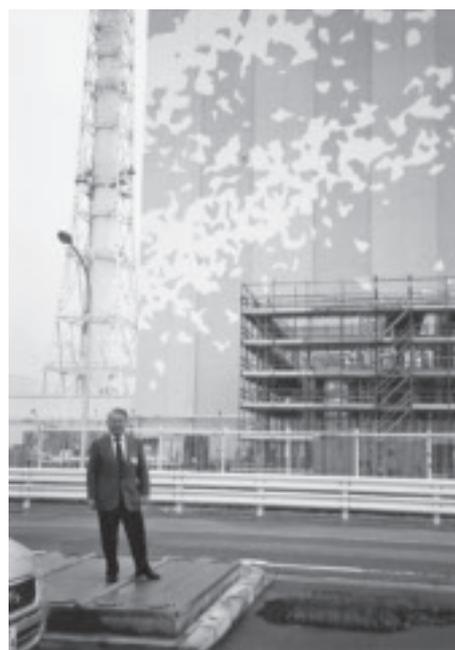
ていたものである。隣の2号機は東芝グループの請負であった。だいたいの話であるが、原発1基について、電力会社の職員が150名、外注維持管理人員では1千名、1Fには6基があったから敷



1F-1号機棟側面(棟屋右上に1の字が)



左から2、3、4号機棟



4号機棟を背に

地内には日中約7千名の人が稼働しているのが平時の体制であった。

案内してくれたかつての同僚の説明では原発1基24時間の電力売り上げは約5億円、うち、電力会社分は約2億円、残り約3億円は電源3法や約束に従って地元や関係諸機関を潤す方向に流れ出して行くのが仕組みだそうだ。電力会社にとっても受取側にとっても、正に「打出の小槌的存在」で、多少の事故や故障があっても隠せるものは隠して「原発を停止させない」ことが最大眼目になって行ったらしい。なぜなら原子炉が止まったときは、つれて受取側にもお金が途切れるシステムになっている、隠し体質になるのは致し方ないと頷けた。

此処の見学に続いて、20kmほどの南にある福島第2原発(2F)も見学させてもらった。

2010年5月には柏崎刈羽原発、今年3月は女川原発(東北電力)を見学させていただいた。テロ対策のために、いずれも建屋の中に入ることは許されて居らず、近くからただ眺めて歩いて、雰囲気を感じするだけのことである。

最後に「想定外」のことにふれたい。かつての同僚の話を私なりにまとめて見る。

『想定外とは想定できなかったということではない。これ以上想定すると投資予算額を超えてしまう、採算ラインを越えてしまう、だから、想定値をこの辺にしようとの妥協の力が大きく働いてしまったということである。これを容認できなくて正論を主張する方は、理不尽にも原子力村から次々と追われて行った。核分裂を完全に制止することは出来ない事態が露米で起きたことから、米仏ではメルトダウンは避けられないと想定がえを行い、8年前にはメルトダウン対応型の原子炉に整備しなおしている。不都合を隠して安全神話を作り出し、合理性に欠ける安全神話を盾代わりに安全性を低く抑えてきた日本の不備と不全が1Fで一気に露呈した。』

そんな風に整理してみると日本の原発は「技術100%」ではなく、一部に神話などという奇術が入っていたのかも知れない。ここで記すのは適当と考えている訳ではないが、川柳らしきものを一つ(原子

炉の 神話の穴から 放射線)というものである。残念である。

16年前に記した本稿前半の阪神淡路大震災感慨文の中で、この大震災を「天災+人災」と著したが、東日本大震災は放射能禍という人災ウエイトが特段に大きく国や地方の行政はもとより、とりわけ被災者の皆様が苦渋、苦難している。「震災のために故郷を遠く離れた人の心のやり場がない」などと通り一遍に言われているが、「人災のために故郷を強制的に追われた人の心は悲しく、悔しく、せつない」と言うべきところなのであろう。

考えて見ればである、なぜ人災がこうも易々と起こるのであろうか。人災の元凶は霞ヶ関の行政(内閣、役所・役人)であると言われ続けてきたが、今になると私は、その罪だけが大きいとは思えなくなっている。真犯人は「隣町永田町の立法府(国会と議員)である」と断定したくなった。何故なら国の根幹方針決定は大半を反目のまま先送り決定できない。単に時間と歳費の無駄食いに終始しているからである。

日本の今日、各地にある原発が休転するのは致し方のないところであるが、東京永田町にある国会という原子炉は、長く空虚という冷水の循環で核反応が抑えられてきており、好い加減に冷水を止め再稼働をしてもらいたい。そして間断なく大きな大きなエネルギーを興し、国と国民に贈っていただきたい。

原子炉に核燃料棒を装着することを「装荷」という。前置きのために書いている。

ひょっとして永田町の原子炉にも奇術があつて、蓋を開けたら只の原始炉で、内部に備長炭ぐらいが装荷されている、それじゃ核ではなく、欠く燃料ではと私ども庶民はあらぬ心配をしてもいる。そんなこんなで老い先はかなり心細い、と結びます。

武藤 征一 (むとう まさかず)

技術士(水道部門)

経歴

- 1942年 1月 生まれ
- 1968年 3月 室蘭工業大学院卒
- 1973年 12月 ムトウ建設工業(株) 設立
- 1974年 2月 北開工営(株) 設立

